BGN NEWS UNESCO
BGNユネスコニュース
発行： 2020年 12月25日（金）
文化学園長野中学・高等学校 No. 5

持続可能な開発目標（SDGs）の意味を考える

「誰も取り残さない」ために…

国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」について、学校の中だけではなく、テレビや街の中で目にする機会が増えてきました。SDGsの最大の目標は、世界から貧困や飢餓、あらゆる不平等を無くし、「誰も取り残さず」全ての人が平和で豊かな暮らしを営む世界を作ることです。そのためには、困難な状況にある人たちをどのようにエンパワメント（力を与えること）していくかが重要な課題になります。
私たちは、どのような意識をもって「持続可能な社会づくり」に立ち向かえばよいのでしょうか。

人間の尊厳、本当の平等とは？　― 援助のあり方と、私たちの生き方を問う

持続可能な社会って、どんな社会？ ～釣り名人がすべきこと

あなたは魚つりの名人で旅をしていました。
川のほとりに来ると、お腹をすかせて困っている人がいました。
あなたはこの人を何とかしてあげたいと思います。
さて一番いい方法はなんでしょうか？」

こんな質問、どう答えますか？少し考えてみましょう。
魚を釣ってあげる？
釣った魚を売って、そのお金を渡す？
その場合、どんなことが問題？

社会的に弱い立場に置かれている人がいるとき、何かしらの支援を行うことも必要です。この「釣り名人」課題には、支援をするときの大切な視点があります。

「魚を釣ってあげたり、お金をあげたりする」ことで、とりあえずそこにある問題を解決することができます。しかし、魚を食べてしまったり、お金を使い切ってしまったりすると、「後には何も残らない」という問題があります。つまり、寄付や募金という行為は、目の前に飢えて死にそうな人がいる場合など、救急支援に有効な考え方です。いけないのではなく、必要に応じてすべきものです。間違ったモノや金銭の譲渡などは、受け取る側が「援助慣れ」してしまい、自助努力（じじょどりょく：自分の力でなんとかしようとすること）の気力を削いでしまうことになりかねません。

では、「一緒に釣りをして、その人に魚の釣り方を教えてあげる」と、どうなるでしょうか。その人は、あなたがいなくなった後も、自分の力で魚を釣り続けることができます。この支援方法を「自立支援（じりつしえん）」といいます。この方法は、自分が魚を釣れるようになるだけでなく、仲間や子どもにも釣り方を教えることができるようになるので、将来世代の人たちもずっと魚を釣ることができるようになります。これが「持続可能性」の考え方であり、自立支援は「持続可能な社会」を作るのに、とても大切な考え方であるといえます。

かつて日本は世界一貧しかった　－戦後復興とODA

さて、今でこそ「先進国」といわれる日本ですが、60年ほど前までは世界の「最貧国」でした。

第2次世界大戦の敗戦後、日本は大変な物資不足・食料不足の中、戦後復興をしなければなりませんでした。そこで、国際機関などから多大な援助を受けることになったのです。その額は12兆円を超えました。ララ物資やケア物資といった物資援助からは、日本にパン給食が広がるきっかけとなった小麦のほか、食料などの大量供給がありました。皆さんのおじいさん・おばあさん世代では、脱脂粉乳という粉ミルクの一種を給食で飲んだことがある人もいるかもしれません。栄養価は高いけれど味は今の粉ミルクとは全く違うもので 、牛乳の脂肪分を取った残りの成分だったためコクがなく、「好きではなかった」という人が多かったようです。それでも生きるためには必要でした。

昭和20年の銀座。廃車のバスで生活する親子（朝日新聞Digital）

また、世界銀行からも6兆円を借り受け、大規模な復興事業を行いました。1964年の東京オリンピックに向けて整備された東名・名神高速道路や東海道新幹線、黒部ダムも、こうした「借金」をして作られたのです。日本がこの借金を、バブル経済崩壊後の1997年まで返済し続けてきたことはあまり知られていません。

ララ物資による小麦支援のパンと脱脂粉乳の給食（昭和23年ごろ, 朝日新聞Digital））

今、日本は、GDP（国内総生産＝簡単に言うと、日本がどれだけ儲けたか）世界第3位（2019年）という経済大国になりました。そこで、今度は自分たちが国際協力を行う番であると考えて、アジアやアフリカなどの支援が必要な国々に対して、ODA（政府開発援助）で様々な国際協力を行っています。

国際協力とは、恵まれない国に一方的にしてあげるものではなく、「お互い様」の心で行うべきものなのです。

援助に必要な「お互いさま」の心

ここからは少し、このユネスコニュースの筆者の経験をもとにお話を進めてみましょう。

中学校のダンス大会 制服は民族衣装（2011年）

私はJICA（国際協力機構）のボランティア・青年海外協力隊として、2011～2013年の2年間、ブータンのろう学校で働いていました。当時、ブータンは世界でも特に貧しいと言われる「後開発途上国」であり、日本から25年にわたり多大な援助を受けている国でした。ついこの間まで鎖国政策を取っていたために開発が遅れ、主にインドと日本の支援によって、なんとか国を保っている状態だったのです。ブータンで直接的な支援を行っていたJICAや協力隊はとても有名で、その恩恵が広く知られていたため親日家が非常に多く、「JICAボランティアです」というと、いろんなものが割引になったり、普通の観光客は入れない場所に入れてくれたり、とても手厚くもてなしてもらえたものです。

ブータンに赴任して2か月たったころ、日本で東日本大震災が起こりました。この年、日本は「援助する側」から一転し、「世界一の被援助国」（世界で最も援助を受けた国）となりました。未曽有の大災害に、ブータンでも大きく被害が報じられ、同僚や友人に「あなたの日本の家は大丈夫？」と心配されました。この時、ブータンの携帯電話会社が、電話のシステムを利用して日本への募金を募り、私の周りのブータン人たちもこぞって募金を行ってくれていたことが今でも心に残っています。また震災翌日には国王が、翌週には首相が、在ブータン邦人を招いてお祈りを行ってくださいました。教育省の大臣から私の携帯電話に電話がかかってきたりもしました。

このとき「日本はブータンをいつも助けてくれている。今は、私たちが日本を助ける番だ」という声を沢山聞いたのです。これはブータンの宗教的な教え「富めるものが貧しいものに施すのは当然」というものに基づいていることや、お互いを思いやり助け合うのが人間として当然だと考える「助け合いの国民性」からも来ているのだと思います。ブータンにホームレスや一人暮らしの老人がほとんどいないのは、近くの誰かが必ず手を差し伸べるからです。「誰も取り残さない」は難しいことではなく、人間の本来的な能力である「身近な人への愛」として備わっている感覚なのではないか、と気づいた出来事でした。

援助される側のプライド　―自立のために必要なこと

福島で歓迎を受けるブータン国王夫妻（2011年, ブータン国王facebookより）

また、こんなこともありました。

日本の原発事故を受けて世界各国の首脳や大臣などが次々に来日をキャンセルされる中、震災後初めて日本を訪れた国賓（国として受け入れるお客様）は、ブータン国王のジグメ・ケサル・ナムゲル・ウォンチュク陛下と、ご結婚されたばかりのペマ王妃のお二人でした。お二人は福島へも訪問し、亡くなった方々のためにお祈りをささげたのです。この時の報道によって日本はブータンブームに沸き、ブータンに暮らす私のもとへも日本のメディアからの取材依頼が沢山ありました。

しかし、私の周りのブータン人たちの中には、この訪日を少しネガティブに捉える人もいました。

「国王は、ブータンがこれまで受けてきた日本からの援助に感謝していることは間違いない。でも、国王は、こんな時でもまた次の援助をお願いしなければならない立場にあることには変わらないんだ。僕たちは、国王が様々な国に頭を下げ続けていることが耐えられない。」

この言葉に、私は何も言えませんでした。日本の援助行為によって、いつの間にか二国は対等な関係ではなくなってしまっていたのです。しかし、日本は経済力によって優位に立っているだけであり、いつこのバランスが覆るのかは誰も分かりません。

援助はその時たまたまできる側にある人が、困っている人に手を差し伸べる行為です。決して「してあげる、してもらう」のではないのです。人間は基本的に平等であるという根本が「王様が頭を下げることが耐えられない」という一言に込められていたように思います。

このように、援助する側、される側のパワーバランスは、人間の尊厳にも関わるとても難しいテーマです。いずれの立場にあっても、人間としての尊厳と、お互いを尊重する心をもって対等に接することの大切さを考えなければなりません。

また、援助されることが当たり前になる「援助慣れ」によって、自分たちで何かを作り上げようとする努力をしなくなることも問題です。

実は、私たちの日常でも同じことが起こりうるといえます。

例えば、与えられ続けること、言われたことをその通りにすることに慣れていると、自分の頭で思考・判断することができなくなって、自分に都合が悪い時や何かが起きた時に全て人のせいにする人間になってしまいます。心当たりはありませんか？自分の周りで起こることに、責任と当事者意識をもって、主体的に考え行動することが、ユネスコスクールで育てたい能力のひとつなのですが…。

自助努力せず、権利を主張してばかりではありませんか？

修道院で生活し修行する少年僧（2012年）

ユネスコ世界無形文化遺産ー 和食（washoku）のたしなみ

もうすぐお正月。みなさんの家庭では、お正月に「おせち料理」を食べますか？

2013年、「和食」（日本人の伝統的な食文化）がユネスコ無形文化遺産*に登録されました。これは、料理そのものだけでなく「自然を尊ぶ」という日本人の気質に基づいた「食」に関する「習わし」全体が登録されたものです。

和食の4つの特徴は、(1)多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重、(2)栄養バランスに優れた健康的な食生活、(3)自然の美しさや季節の移ろいの表現、(4)正月などの年中行事との密接な関わり です。

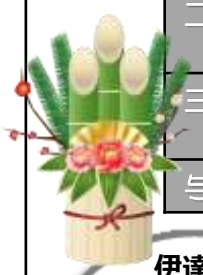
日本の食文化は、年中行事と密接に関わって育まれてきました。自然の恵みである「食」を分け合い、食の時間をともにすることで、家族や地域の絆を深めてきたものです。今号では、私たちの地域に残る伝統的な和食文化「箱膳」についてもご紹介します。

＊無形文化遺産：芸能や伝統工芸技術などの形のない文化であって、土地の歴史や生活風習などと密接に関わっているもののこと。

＊御節（おせち）＊

おせちとは、お正月に食べるお祝いの料理のこと。もともとは、平安時代の宮中で季節の節目にあたる節供（せっく）料理を「御節供」「御節料理」と呼んでおり、のちにその中で最も豪華な正月料理を指すようになりました。

それぞれの料理には、縁起の良い意味があります（下図）。縁起物であるおせち料理を重箱に詰めることで「福が重なる」「めでたさを重ねる」という願いが込められています。また、重箱には保存しておく容器として実用的な役割も持っています。重箱は、上から「一の重」「二の重」「三の重」「与の重」と呼びます。「四」は死をイメージさせることから縁起が悪いとされているため、「与（よ）」の字を使っています。　（農林水産省HP）



一の重	祝い善	数の子、田作り、黒豆など
二の重	口取り 酢の物	栗きんとん、伊達巻、昆布巻き、紅白かまぼこ、 紅白なますなど
三の重	焼き物	ぶりの照り焼き、エビの塩焼き、イカの松かさ焼き、 鯛などの海の幸
与の重	煮物	金柑甘露煮、野菜のお煮しめ、筑前煮などの山の幸

伊達巻
形が巻物に似ているので、学問成就や文化の繁栄、知識が増えることを願う。「伊達者」から見栄えのいい、しゃれた、派手なという意味。

栗きんとん
黄金色をしていることから金運を呼ぶ縁起物。漢字では「金団」、金銀財宝を意味する。

数の子
多産であるニシンの卵。子孫繁栄や子宝を願う

海老
背が丸くなることから、腰が曲がるまで健康で長生きできることを願う。実が赤く美しいので魔除けや縁起物の意味も。

＊郷土の和食を守り続ける「ちょうまの会」＊

長野県には、千曲川流域の伝統的な食文化を次の世代に伝承しようとする活動があります。その中心的な活動を担っているのが、「ちょうまの会」です。「ちょうま」とは「千曲」の方言です。

代表的な料理が「箱膳（はこぜん）」と言われる膳料理で、昔は子どもが大きくなると箱型のお膳が送られて、そのお膳を使って食事ができる一人前の人間と認められた証としたそうです。

文化学園長野中学では、ちょうまの会の皆さんをお招きし、箱膳をご紹介いただいていました。今年はコロナウィルスの影響により、交流ができませんでしたが、身近にある素晴らしい文化を若い世代に受け継ぐことはとても重要なことです。

「ちょうまの会」が伝える食文化は、『善光寺平の食ごよみ』という冊子で見ることができます。（写真右上）

善光寺平の食材を使った箱膳。栄養豊富で健康的、とても手の込んだていねいなお料理です。

2016年「ちょうまの会」と中学部交流会の様子

ScooP! インタビュー

NHKのど自慢に出場、「今週のチャンピオン」に！
コロナ禍で元気のない皆を元気づけたい！
中学2年　橋本 怜奈（はしもと れな）さん

コロナ禍で7か月間中断されていた「NHKのど自慢」が、10月4日、須坂市メセナホールから再開されました！この記念すべき大会で、本校中学2年生の橋本怜奈さんが山口百恵の「プレイバック PartⅡ」を熱唱、「今週のチャンピオン」に輝きました！

橋本さんに、大会の出場のきっかけとこれからの目標を伺います。

―本選出場までの道のりは？
まずハガキで応募をし、一次選考で選ばれた人が前日の予選会に参加しました。沢山の人が予選に来ていてびっくりしました。予選は歌と簡単なインタビューで、その日の夕方に電話で本選出場の連絡が来ました。

―出場しようと思ったきっかけはなんでしたか？
私の家はバス会社なのですが、コロナの影響で仕事がほとんどなくなってしまい、従業員の皆さんや父、母も元気をなくしていました。その時、予選会のことを知った従業員の方が、「出てみない？」と勧めてくれたのです。

―どんな気持ちで本選に臨みましたか？
ボーカルスクールに行っていたこともあり、人前で歌うことは慣れていたし、無観客だったので、それほど緊張せず、実力は出せたと思います。ただ、出場者の家族が結構来ていて少しだけ気が張りました。

―チャンピオンになったことで、周りの人はどんな反応でしたか？
びっくりしてました（笑）。会社がとても盛り上がり、みんな「すごいねー！」と喜んでくれました。沈んでいた雰囲気が明るくなって、活気が戻ったように思います。それが一番嬉しかったです。

本番、生バンドの演奏で堂々と歌う橋本さん

―これからの目標や夢は何ですか。
音楽に関わる仕事に就きたいと思っています。
現在、歌、ギター、ピアノを学んでいるので、それを活かして、人を笑顔にできるような、心の支えとなる音楽を作っていきたいと思います。

バトントワリング全国大会でも活躍！
自分の笑顔が人を笑顔にできる喜び
高校１年　野村 日莉（のむら ひまり）さん

幼児～大人と幅広い年代を対象にした「長野クリスタルバトン」というクラブチームで活躍する、高校1年の野村日莉さん。昨年度はバトントワリングの全国大会に相当する「Japan Cup バトントワリング全国大会 in 武蔵の森総合スポーツプラザ」にも団体メンバーとして出場しました。今年度、様々なイベントや大会への参加が叶わない中で、どのような目標をもって続けているのか、お話を伺います。

―バトン・トワリングとはどんな競技ですか？
私の行う競技は、技術の高さや団体としてのまとまりなどを、総合的に審査されるものです。一般的に知られている体操のバトン競技個人の演技が、大きな団体になったもの、というイメージです。

―バトンを始めたのはいつ、どんなきっかけでしたか？
もともと姉が入っていて、興味を持ち、小学校1年生の時にクラブに入りました。小中学校のころには、学校の文化祭や交流会などで自主的にバトンを披露してきました。

―バトンを続けていて、よかったことはなんですか？
小さい時とても人見知りだったんですが、バトンを続けていくうちに、人から見られることや人前で何かすることに抵抗がなくなりました。また、クラブにいる様々な年代の人と友達になれて、ずっと付き合っていけていることがとても嬉しいです。

―今年は活動が制限されていましたが、どんなことを考えましたか？
今まで休まないでやってきたので、とても変な感じでした。イベントがなくなったことで、改めて見てくれるお客さんの拍手や声援がモチベーションになっていたんだと感じます。今、成長している実感がないのはそのせいかな…

―これから、どんなことを目標にしていきたいですか？
見せる競技なので、最終的には自分が楽しんでいるところを見せたほうが、人を楽しませることができると考えています。笑顔は大事です！これからチームをまとめる上級生になるけれど、上下関係なく、高校卒業まで、とにかく楽しんでいきたいと思っています。

BGNユネスコニュース
あなたの隠れた活躍を教えてください！

学校外で面白いことをしている人、他校や社会人団体の人たちとSDGsに関わる活動をしている人など、本校の隠れた逸材を探しています！ 取材の上、本誌に掲載させてください。自薦・他薦は問いません。
年中募集中ですので、これからの活動も大歓迎です！

★中学職員室 BGN編集担当（長田・榎本）まで教えに来てください！